

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第16号

発行日 2009年7月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 報告 2009年度部落史出張講座

### 地元で学ぶ地元の歴史 in 千本

第1回

近世 蓮台野村の歴史

— 甚右衛門から元右衛門 —

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

五月二十九日、当資料センター主催の「部落史出張講座—地元で学ぶ地元の歴史—」の第一回目を楽しくコミュニティセンターで開催しました。この講座は、地域の歴史を地元の方々とともに学習することを目的として企画したものです。当日は、地元の方々、小・中学校の先生方、千本地区に隣接する佛教大学の学生など八〇名近くの参加がありました。

まず、今回の講座の協力団体である地元の「NPO法人くらしネットワーク21」の森澤謙一さんより「この講座で取り上げられる人々は千本のキーパーソンといえる人々たちです。この十数年間、部落史研究が大きく進んできた中で、このような形で地元へフィードバックされるということはとても大切なことだと思っています。今後、まちづ

くりの取り組みなどにどう生かしていくかを考えていきたい」との挨拶があり、引き続き辻ミチ子さんが講演を行いました。講演の要旨は次の通りです。

\* \* \*

中世末期、近衛家に隷属していた「野口の河原者」といわれる人びとが、朝廷へ食材を納める役割をしていた嵯峨供御人との間で猪の皮をめぐって相論を起こしたことが史料にでており、当時、この野口の河原者は斃牛馬の処理や皮革の生産・流通の仕事をしていて、経済力をもった集団だったことがわかる。

江戸時代には千本の野口の地で、年寄・甚右衛門のもとで皮革の仕事に従事していたが、支配力の強かった甚右衛門が宝永五(一七〇八)年に死去すると、野口の人々は葬送の地であった蓮台野へ移転させられ、蓮台野村が成立する。

この蓮台野村の人びとの役目や仕事は、四座雑色の元での六角牢屋敷の外番役(牢屋敷の見張り)、

河原の芝居小屋などの人が多く集まる場所での警備、芝居小屋からの槽銭の徴収(これは中世からもっている権利でも大きな収入となっていた)、御所の掃除をする小法師の仕事(中世の終わり頃から続く仕事で朝廷との関わりをもつ名譽ある役だった)、太鼓の皮張りなどであった。

江戸時代後期には、皮革業などで経済的に豊かだった蓮台野村が、今宮神社の太鼓を無料で張り替えるかわりに神事に参加しようとしたが、地元の人たちが反対をしたという出来事が文書に残されている。豊かになって力をつけてきた蓮台野の人びとを抑えようとしたのである。

明治に入って、経済力もあり医学面でも活躍をするようになった蓮台野村から「われわれは平民と何ら変わりのない村だ」と、身分引上げ請願の声をあげたのが年寄・元右衛門であり、またその子升屋茂兵衛であった。

京都府全体が殖産興業、教育に力を入れていた中で、被差別の村々でもそれに呼応して特に教育に力を入れて新しい村づくりを目をむけていたことを、この厳しい時代の今、詳しく検証していくことが必要とされている。

第2回

歴史家 益井信の生涯

講師 小林 丈広さん

(京都市歴史資料館)

六月一二日、楽只コミュニティセンターで第二回目の講座が開催され、七〇名近い参加者がありました。小林丈広さんが「歴史家 益井信の生涯」と題して講演を行いました。

講演の要旨は次の通りです。

\* \* \*

益井信は前回の講座で取り上げた益井元右衛門の孫に当たる。京都府綴喜郡井手町の資産家仁木家に生まれ、元右衛門の子茂平(茂兵衛)の養子になり、益井信と名乗り、茂平同様眼科医として医療活動を行った。

今回の表題であるが、歴史家とは、歴史学を研究している学者をさすだけではなく、自分の住んでいる地域や自分の家や祖先の歴史に関心を持ち調べたりする人も歴史家といえるのではないか。このように歴史家をとらえると、被差別部落の起源についての論稿を発表している益井信も歴史家と捉えることが出来る、ということである。

部落の起源について、異民族起源説に関してまず説明があった。

戦前いち早く部落史研究を行った喜田貞吉であるが、喜田は自身の個人雑誌『民族と歴史』の「特殊部落研究号」の中で異民族起源を明確に否定している。部落の起源について喜田の説くところは「社会的落伍者説」とでもいえるということである。戦後に入っても異民族起源説を唱えた滝川政次郎のような人がいるが、これに対しては藤谷俊雄は社会的階級の起源を否定するためであると指摘している。さらに、賀川豊彦は『貧民心理の研究』の中で「犯罪種族であることは誰も拒むまい」と述べていること、高橋貞樹が部落史を生成期、法制的に確立期、社会的迷信として存続期という三つの時期に区分して理解しようとしたこと、柳田国男は「所謂特殊部落ノ種類」では「漂泊民」説をとったが、その後「常民」に焦点をあてた民俗学を築く中で部落についての研究から離れていったことが説明された。

一九〇五(明治三八)年一月、京都の医家の間に出されていた『京都医事衛生誌』に、益井信は、「ゑたノ根源説ニ就テ」を寄せて

いる。会員の高橋正意が紹介した被差別部落の起源についての諸見解への批判という形で、益井は「予ハゑたノ根源ヲ食肉ニアリトナスモノナリ」と述べている。益井によれば、日本では食肉は古くから行われていたが、やがて殺生を禁断するという制度が出来たことにより「ゑた」が生まれたと述べている。益井信が部落の起源について『京都医事衛生誌』上で述べたのは、先に紹介した人たちの見解が出される以前のことである。

一九二二(大正一)年一〇月に奈良で松井庄五郎によって刊行された『明治の光』に「碧水」名で掲載されている「所謂ゑたの根源に就て」であるが、これは『京都医事衛生誌』上に益井信が発表した「ゑたノ根源説ニ就テ」と同じものである。つまり『明治の光』に見る「碧水」という号名は益井信を指すといえる。このことから、医療活動の傍ら部落の歴史について多大の関心を持ち、部落の起源についての所見を発表した益井信はいうまでもなく歴史家といえるだろう。

益井信については、歴史家という面だけでなく、一九〇〇(明治三三)年、小法師役を勤めてきたとい

うことで士族編入を願し、士族編入が認められると京都府知事を招き祝宴会を開催するという京都の名士としての一面があったこと、一九〇三(明治三六)年に創立された部落改善団体の大日本同胞融和会に参加していることなどが紹介された。また、京都盲学校所蔵資料に残っている盲学校の見学を紹介したと思われる益井信の名刺や、京都市長等の名前の中に益井信の名前も見ることが出来る寄付者名簿等から、京都盲学校の維持等に尽力した面も併せて紹介された。

(運営委員 中島智枝子)

第3回

全国水平社

中央執行委員長・南梅吉

講師 朝治 武さん

(大阪人権博物館)

六月二六日、楽只コミュニティセンターで第三回目の講座が開催され、六〇名を超える参加者がありました。朝治武さんが「全国水平社中央執行委員長・南梅吉」と題して講演を行いました。

講演の要旨は次の通りです。

\* \* \*

南梅吉は滋賀県に生まれ、17歳

で千本に移り住み、地元の青年団長として部落改善運動に力を入れ、全国的に活動を展開し、活動家としてその名を知られるようになった。

彼の改善運動家としての思想的寛容さや、広い影響力から全国水平社の初代執行委員長にえらばれ、その事務局は彼の自宅におかれた。全国水平社の結成以降、各地の水平社結成の支援、運動資金の調達、改善費や制度要求のための政官界との交渉を担ったが、それらの活動ゆえに金銭をめぐるトラブルやスパイ事件にまきこまれ、全水委員長の辞任に追いこまれる。

その後も日本水平社を結成し、全水の歴史と伝統を引継ぐものは自分達だという自負のもと、綱領宣言とも全水と同一のものを作成しながらも、徹底的糾弾は道徳的説諭とし、部落の人達の生活擁護運動を続けた。

戦後は人種解放同盟委員長として登場し、機関紙「カイホウ」を発刊する(資料紹介あり)。

このような南梅吉の活動については、裏切り、運動からの脱落、右翼的と断罪されて、初代委員長の位置にありながら、まっとうな評価がされてこなかった。しかし

当時の史料を丹念に探ると、差別解消に向けての独自の考えや活動は、水平運動の一面を象徴し、そこから当時の全国水平社のあり方が見えてくる、と史料を引用されながら説明された。

またこれまで改善運動、融和運動を克服する中で解放運動が生まれたとされてきたが、現実の運動の中ではそれらは重なりあって展開し、現在の運動にも継続していると指摘された。

一方、人物評価をすることのむつかしさに触れ、今日の価値観で評価するのではなく、当人の活動した時代状況を踏まえ、判断すべきだと力説された。

南梅吉の人物、活動の全貌に触れたい方は、『京都部落史研究所報』第10号(第12号(一九九九年七月(二〇〇〇年一月)に掲載された朝治武「創立期全国水平社と南梅吉」と、秋定嘉和・朝治武編著『近代日本と水平社』(部落解放・人権研究所、二〇〇二年)に収録された朝治武「日本水平社の主張と運動」を参照されたい。

(運営委員 湯浅孝子)

## 「ふじの人のための」近現代部落史の よみかた・しるべかた(その一)

杉本 弘幸  
(京都市市政史編纂助手)

### I はじめに

私は都市社会政策や社会福祉の歴史を研究している極度に貧困なワーキングプアの在野研究者だが、なぜか「近現代部落史」研究について相談を受けたり、尋ねられたりすることがしばしばある。また不思議なことに学会誌から書評や論文の査読を依頼される。

私はこれまでの研究で、一般の都市社会政策と、被差別部落対象の融和政策・朝鮮人に対しての内鮮融和政策の関係構造の分析を行い、地域社会の都市社会政策による変化を分析した。そして都市社会政策自体が労働運動や水平運動、在日朝鮮人運動などの社会運動の影響や、融和団体、内鮮融和団体への地域社会のリーダー層の参加によって、一九二〇―六〇年代に至るまで、政策と運動の相互作用によって政策が変容していくことを指摘してきた。以上のような観点で、都市社会政策の展開を歴史的に通観するために、一九二〇―六〇年代の都市社会政策の構造分

析を行ってきた。

したがって、私にそのような相談や依頼などがくるのは極めて不可解なのだが、周囲の人からみれば、立派な「部落史をやっている人」と認識されているのだろう。

実はいま、マイノリティの歴史的な研究は一種の流行といってもいい。歴史学やその周辺分野の学生、院生でも近現代史の場合、卒業論文や修士論文でマイノリティを対象としたテーマを選ぶものは多いといってもいい。それが良いことだとは全く思わないが、いわゆる「かつこいい」テーマの一つになっている。

現在では例えば在日朝鮮人史研究、あるいは女性史やジェンダー史研究の基礎知識がないものは、日本近現代史研究者の資質に欠ける、あるいは「単なる専門バカ」と周囲から判断されるだろう。また、前近代の歴史学研究者も前近代は基本的に身分制社会であるため、専門とする時代の被差別身分史・賤民史研究に関する基礎知識

がない場合は同様の判断をされてしまう。

だが「近現代部落史」研究についてはそうではない。たとえば「水平社」というタームを知っていても、高校の教科書レベル以上の知識は期待できない。現在の研究状況では「近現代部落史」研究について全く知らなくても、日本近現代史研究は十分にできるのである。このような状況をさして、「一般歴史学研究者は部落史を蔑視している・避けている」、「部落史を視野にいれていないとはけしからん、差別意識のあらわれである」などというのは非常にたやすい。これまでは根本的な問題に目をそむけ、それですましてきたのである。

しかし、いわゆる「関係者」と関係のない人でこれほど情報や認識の格差がはなはだしい研究分野もそうはあるまい。今、必要なものはその間をできるだけ埋めていくことに尽きる。「部落史ギルド」の中でいくら努力して研究してもそれが広がり、共有されなければ意味がないだろう。またそのような研究は、いったんバックラッシュにさらされたとき、きわめて「弱い」のである。すくなくとも、それぞれのデイシプリンの研究水準や相互批判に耐えうる研究をしなければならぬのである。

これまで、私は「近現代部落史」

研究の現状に対して幾度か論評を行ってゐる。まず最初に「ここ最近の研究論文を改めて読み直してみると、論文の数はたしかに多くなったが、研究史を着実に乗り越える論文の書き手は依然として固定化している。論文自体よりも、執筆者名で選んだ方が効率が良いと思うほどにそのレベルの差は歴然としている。そして、研究者の高齢化である。新たな若い研究者は非常に少ない。(中略)近代部落問題研究から近代日本を対象とする研究に何が発信できるのか？多様化するマイノリティ研究の中で近代部落問題をどのように位置づけるのか？が、そして少なくとも部落問題研究者以外に開かれた、共有化される研究(それは当然「日本史学」研究者だけではない!)を意識しながら行なうことが今最も必要とされているといえよう。もはや「部落史」というカテゴリーに閉じることは許されないのである」(拙稿「近代日本社会と差別をめぐる研究動向」『部落問題研究』一五八輯、二〇〇一年一月、一五〜一七頁)と述べた。

さらに「筆者は以前も述べたが近現代部落史の先行研究無視から起こるレベルの低さ、同じような叙述の再生産、発表メディアの偏りの克服と共に、部落問題の歴史

的研究から歴史学研究全般に何が発信できるのか常に問いつながら研究する必要があるだろう」(拙稿「書評 小林丈広編著『都市下層の社会史』」『ヒストリア』一九三号、二〇〇五年一月、二三三頁)と再度論評した。

また、「いまさらながら強く感じたのは、近代部落史研究自体のいびつな構造である。部落問題に関わる研究者はその多くが、部落解放運動や人権教育、同和行政の關係で、研究を行っている層で構成されている。運動や地域社会との關係において、研究に関わる制約を受けざるえない。研究の発表媒体も、部落問題や人権問題専門誌にほぼ限定されている。このため一般の歴史学研究とは、切り離された低水準な研究が極めて多く、「部落史」研究者以外には、極めて目に触れにくい状況にあった。そして「部落史研究は水準が低い」と一瞥されてきた。特に畑中敏之が指摘したように、前近代「部落史」研究が実質的に被差別身分史研究であり、被差別民史、賤民史というある種の幅の広さを持つものに対して、近代「部落史」研究は完全な旧皮多、非人身分の歴史Ⅱ部落問題史になっている。しかも他の社会的マイノリティ研究とは異なり、運動の立場や利害の相違を超えた、部落問題の歴史的研究

を主目的とする、何れの研究機関にも属さないオープンで全国的な学会や研究会は、いまだ存在しないのである(中略)「狭い部落史研究」では、歴史学研究全体に貢献することは、できないのだろうか？

私は可能だと考えている。部落問題という素材に徹底的にこだわって、研究を進めていくという方向性である。ただ意識して、広い分野で部落問題研究を位置付け、平易な言葉で叙述する努力は、今後ますます必要となってくる。その他にも、これまで取り上げてきた研究のように、極めて限られた研究者ではあるが、一般歴史学やマイノリティ研究の研究蓄積を踏まえた、新しく実証的な研究も行われている。現在の研究状況でいえば、朝治武の研究が代表的なものだろう。確かに過度の「部落民意識」の強調には、私は強い違和感を持つが、現在とは比較にならないほど、差別が苛烈であった、戦前期の近代部落問題研究には、必須の研究課題である。また歴史学という狭い枠組みだけではなく、学際的なマイノリティ研究や、差別理論の研究動向と併せて考えれば、黒川みどりの部落問題をレイシズムとの関わりで位置づけるような研究の必要性はさらにますますだろう(拙稿「書評 鈴木良著『水平社創立の研究』」、『ヒストリア』二

〇一〇号、二〇〇六年九月、一一〇〜一一一頁）とも指摘した。このような認識は残念ながら、いまでも全く変わっていない。

そこで、このような立場をとる社会政策／社会福祉史研究者である私が、どのように「近現代部落史」研究をおこなっているかを紹介していきたいと思う。全く基礎知識のない「ふつうの人」のための「近現代部落史」のよみかた・しらべかたを個人的な経験から叙述していきたい。

## Ⅱ どんな研究があるかしらべる・あつめる

さて、なんらかの事情や研究上・仕事上の必要から、「近現代部落史」について、調べる必要があるあなた。普通、ある研究テーマをたて、それに関連する文献や論文を探すとき、どうするだろうか。だいたいはず、『史学雑誌』の「回顧と展望」を二〇一三〇年分をみる。そして、『史学雑誌』の文献目録を二〇一三〇年分チェックする、というような感じだろう。また、インターネットで国立情報学研究所のナクシス・ウェブキャット、サイニーや国立国会図書館の雑誌記事索引、あるいは日外アソシエーツのマガシンプラスなどで、適当なキーワードを入れたり、研究者名で検索するだろう。

だが、「近現代部落史」研究の場合、これでは必要な研究文献や論文が探せない。「近現代部落史」の研究書・論文はほとんど「回顧と展望」には載らないし、文献目録にも採録されない場合が多い。もちろんサイニーや雑誌記事索引・マガシンプラスなどの検索にもひっかからない。発表媒体が非常にマナーな場合が多いからだ。

まず最初に京都部落史研究所編『部落史研究文献目録』（柏書房、一九八二年）をみるべきである。これは古代から近現代にいたるまでの部落史に関わるほぼ全ての文献・研究を網羅した目録である。これが優れものなのは、索引の充実ぶりである。さらにすばらしいのは戦前の研究から採録してあるので、史学史的な研究にも大いに利用できる。他にも類書があるが、この目録は、論文や文献の原典を確認できたものだけを採録しているため、データの正確さと採録数で他に比類ない。

では、この目録の刊行年以降はどう調べたらよいか。そこで『部落問題研究』の毎年の「成果と課題」特集号についている文献目録を見よう。これは、部落問題研究所資料室の所蔵文献・雑誌をもとに、歴史学の専門研究者や大学院生が補充調査しており、信頼がおける目録である。だがこれも

二〇〇〇年を最後に作成されなくなってしまうのは極めて残念である。目録作成の再開が望まれるところである。また『部落解放研究』も例年夏の歴史特集号で同様の文献目録を作成している。一時期はひどく情報漏れやデータの誤りが多かったが、最近では歴史学の専門研究者が補充調査・修正をしているので、非常に精度が高くなった。現在では唯一の貴重な情報源である。近年のものは部落解放・人権研究所のホームページで公開されている。しかし、残念ながら、これも二〇〇九年度以降のものは、『部落解放研究』に掲載されず、部落解放・人権研究所のホームページで公開される予定であるという。今後もぜひ文献目録の発行の継続を強く要望したい。

最新の情報は、隔週で京都部落問題研究資料センターがメールマガシンドで刊行物情報を発信しているので、資料センターのホームページからチェックしてほしい。

さて、これで必要そうな文献や論文の目星がついた。そこであなたは途方にくれるだろう。本になつているものとはかく、必要な論文が載っている雑誌が、聞いた事もない、似たことのない雑誌ばかりなのだ。簡単に手に入るの『部落問題研究』、『部落解放研究』（近年では多くの論文が部落解放・人権研

究所のホームページで公開されている、あとはせいぜい『部落解放史ふくおか』（現在は『リベラシオン』と改題）ぐらいで、他の雑誌はネットで検索してみると大学図書館や公共図書館では所蔵しているところは日本全国で五件とか、二〇件ぐらいとかしかない。これでは本や論文を集めるだけでたくさん郵送してもらったり、あちこちかけずりまわらなければならぬ…と思うだろう。

そこで近くの人権問題・部落問題系の研究機関の資料室にいつてみよう。関西地域というと京都府だと、部落問題研究所、世界人権問題研究センター、京都部落問題研究資料センターがあるし、大阪府は部落解放・人権研究所、兵庫県はひょうご部落解放・人権研究所、奈良県は奈良県立同和問題関係史料センターなど、和歌山県は和歌山人権研究所がある。他にもこのような資料室をもつところはある。これらの資料室にいけば、かなりマイナーな刊行物でもほとんど手に入るはずだ。逆にこれらの資料室を利用しなければ、「近現代部落史」研究に関する文献や論文を集めるのは大変なので、気軽に利用すべきである。

さて、ある程度、文献や論文が集まったら、基礎知識をつける必要がある。最初に『部落問題研究』

表1 「近現代部落史」を題材とした主要学術雑誌掲載論文一覧（1980年－2008年）

年代	著者	表題	掲載誌
1980年	鈴木良	日本近代史研究における部落問題の位置	『歴史評論』368
	岩井忠熊	成立期天皇制と身分制－華土族制度を中心として－	『日本史研究』211
	藤野豊	1910年代の融和運動－帝国公道会を中心として－	『歴史評論』363
	藤野豊	融和団体『同愛会』試論－水平社・内務省との関係の考察－	『歴史学研究』485
	大谷正	太平洋戦争下の満州農業移民－農民運動と融和政策に関連して－	『ヒストリア』87
1981年	上杉聰	明治四年賤民制廃止令の法的内容－その施行過程の研究－	『ヒストリア』93
	竹永三男	日露戦後－両大戦間期の地主－小作関係と農民運動－「大正デモクラシー」史研究の批判的検討のために－	『日本史研究』223
1982年	茂木陽一	明治六年北条県血税一揆の歴史的意義	『日本史研究』238
	黒川みどり	三重県における水平運動の成立	『地方史研究』32-3
1983年	中村福治	昭和恐慌下の水平運動－全国水平社九州連合会を中心に－	『日本史研究』247
1984年	水内俊雄	戦前大都市における貧困階層の過密居住地区とその居住環境改善事業－昭和2年の不良住宅地区改良法をめぐって－	『人文地理』36-4
1985年			
1986年	布川弘	日露戦後の都市「下層社会」の結合関係	『ヒストリア』113
1987年	上杉聰	壬申戸籍と近代部落問題の発生	『ヒストリア』117
1988年	藤目ゆき	全関西婦人連合会の構造と特質	『史林』71-5
1989年	金静美	朝鮮独立、反差別、反天皇制－平衡社と水平社の連帯の機軸はなにか－	『思想』786
1990年	相庭和彦	1930年代の融和運動と社会教育	『日本社会教育学会紀要』26
	黒川みどり	融和運動機関紙誌にみる女性	『歴史評論』479
	高木博志	天皇をめぐる「賤」「穢」の変容－維新変革における陰陽師・芸能賤民・夙の諸相－	『歴史評論』486
	茂木陽一	大小区制期の民衆闘争－明治6年新政反対一揆を例に－	『日本史研究』333
1991年	伊藤悦子	融和教育の一側面－内部児童カルト論の検討－	『日本の教育史学』34
1992年	布川弘	都市「下層社会」の形成とナショナリズム	『日本史研究』355
1993年			
1994年	金子マーティン	戦前期繊維産業における被差別集団出身の女性労働者	『歴史学研究』664
	重松正史	都市下層社会をめぐる政治状況－1920年代の和歌山市－	『日本史研究』380
1995年			
1996年	松浦勉	「同和教育」成立史論－同和奉公会体制下の被差別部落と教育－	『教育学研究』63-4
	一盛真	大日本青少年団と被差別部落	『日本社会教育学会紀要』32
1997年	安保則夫	都市衛生システムの構築と社会的差別	『歴史学研究』703
1998年	水内俊雄	住環境改善から見た同和事業の歴史と現状	『地理科学』53-3
	高木博志	近代神苑試論－伊勢神宮から橿原神宮へ－	『歴史評論』573
1999年			
2000年	吉村智博	都市部落における学校経営と財政－栄小学校と尿処理問題－	『ヒストリア』171
2001年	飯田直樹	賤称廃止令前後の地域社会－南王子村－平民祝恐相撲を題材にして－	『歴史評論』611
2002年			
2003年			
2004年	若松司	和歌山県新宮市における同和对策事業による公営住宅の建設過程と部落解放運動－1953～75年－	『人文地理』56-2
	大西祥恵	被差別部落における地場産業の存立基盤－大阪府和泉地区人造真珠産業のケーススタディより－	『日本中小企業学会論集』23
	大高俊一郎	1920年代の融和運動と地域の部落問題－神奈川県青和会の活動を手がかりに－	『日本史研究』505
	吉村智博	沼田嘉一郎小論－救民論と方面委員とのかわり－	『ヒストリア』191
	伊藤悦子	戦後の同和地区における長欠問題の実態と要因－奈良県の長欠及び進路調査に関する一考察－	『関西教育学会紀要』28
2005年	水内俊雄	戦後大阪の都市政治における社会的・空間的排除と包摂－部落民、在日コリアン、日雇労働者などの関連において－	『歴史学研究』807
2006年	吉村智博	維新変革期の摂州能勢郡下田村－明治4年「約定取締一札之事」再考－	『ヒストリア』200

2007年	杉本弘幸	1940-60年代の都市社会政策と地域住民組織—京都市社会行政と「不良住宅地区対策」をめぐって—	『歴史学研究』824
	倉石一郎	〈社会〉と教壇のはざまに立つ教員—高知県の『福祉教員』と戦後の同和教育—	『教育学研究』74-3
2008年	杉本弘幸	戦前期都市社会調査における調査活動と社会事業行政職員—京都市社会課調査を事例に—	『大原社会問題研究所雑誌』591
	杉本弘幸	1950年代「京都」における失業対策事業・女性失対労働者・被差別部落—戦後都市社会政策とマイノリティをめぐって—	『日本史研究』547
	松下孝昭	都市社会事業の成立と地域社会—1920年代前半の京都市の場合—	『歴史学研究』837
2009年	?		

※投稿が会員ならば自由にでき、査読制度をとっている学術雑誌、またはそれに準ずる雑誌に限定した。なお、特定の大学などを基盤としたいわゆる「学内学会誌」や実質同人誌に近い雑誌は除いている。また、実証論文に限定し、研究史整理論文や史料紹介などは除いた。

の「成果と課題」特集号の近現代史の部分を二〇一三〇年分読もう。最初に述べたとおり、これも二〇〇〇年で終わっている。私は「成果と課題」特集号の最後の執筆者の一人だが、ぜひ歴史分野だけでも再開されることを強く要望したい。次に小林茂・秋定嘉和編『部落史研究ハンドブック』（雄山閣出版、一九八九年）、黒川みどり編『部落史研究からの発信 第二巻』（部落解放・人権研究所、二〇〇九年）、友永健三・渡辺俊雄編『部落史研究からの発信 第三巻』（部落解放・人権研究所、二〇〇九年）を読もう。これでだいたい各分野の研究状況が理解できるだろう。これらの研究史整理論文を読んで、集めた文献や、論文に漏れがあれば補充しておく。そして、集めた文献・論文の註をたどって集めることも重要である。

### III 研究をよむ

さて、これでようやく必要な文献や論文が集まった。では読んでいこう。すでに研究史整理論文を読んで気づいただろうが、「近現代部落史」研究の世界にはいろいろな派閥や政治的立場の違いによる対立があつて、同じ論文や研究者の評価でも極端な違いがある。近年ではさすがに露骨なものも少なくなつたが、いまだに自分の派

閥、あるいは自分の学説に都合のよい研究者の論文のみとりあげ、派閥や見解の違いは研究者の研究でとりあげないなどは日常茶飯事である。またにも批判すらしないのである。研究史整理論文を書いた執筆者もさまざま派閥や政治力学から完全に離れるのは不可能である。必ず研究史整理論文をうのみならず、自分の眼で読んで判断しよう。またここであなただけは不安になるかも知れない。なにせあなたがはじめてみるような雑誌や刊行物に載っている論文ばかりだ。では、確認しておこう。文献目録をチェックした際、「近現代部落史」研究に関する研究が相当数行われていることに気づいただろう。年度によってことなるが、この一〇年間ほどでは、毎年、六〇から一〇〇近くの文献や論文などが生み出されている。冒頭にも述べたが、なぜこれだけ研究が盛んな分野のことがこれほど共有されていないのだろうか？

前頁の表1は、一九八〇年以降に主要な学会誌（便宜上の定義は表1を参照）に掲載された近現代部落史、あるいは一部に部落問題の叙述がある研究論文の一覧である。歴史学関係学術雑誌だとあまりに少ないので、地理学や教育学など他の分野の学術雑誌も歴史的なアプローチをとっているものは採録

している。当然洩れている論文もあるだろうが、管見の限り、二八年間に四二本。二九人の研究者が論文を掲載している。主要な学会誌には一年に二本も論文は掲載されてない。つまり、「ふつうの人」たちである研究者や学生・院生に目に触れる学術雑誌などの媒体には、ほとんど掲載されていないということなのである。当然、大学・各地の研究所などの紀要や同人誌・地域学会誌・学内学会誌などにも優れた論文はある。しかし、それらはよほど専門に近い研究者しかみることはないのだ。

このように、査読制度のある主要な学会誌に「近現代部落史」研究に関連する論文を掲載している新たな研究者は一年に一人であるかどうかである。要するに「ふつうの人」の周囲には「近現代部落史」研究やその周辺分野をやっているような人間はほとんどいないのだ。大半の研究が「部落史ギルド」の中だけで生産され消費されていく。それが「近現代部落史」研究の現実である。今後はできるだけ「ふつうの人」の目に触れる媒体に「近現代部落史」研究やそれに関連する研究を発表していくべきだろう。そうしなければ「発信」することなど不可能である。また、「近現代部落史」研究よりはるかに研究水準が高い研究

## レヴェエラースと水平社

関口寛  
(四国大学講師)

分野である在日朝鮮人史研究や、近現代女性史・ジェンダー史研究に関連する論文は、「近現代部落史」研究の一〇倍以上が主要な学会誌に掲載されている。研究者の数も同様だろう。また、同様に研究水準の高い近代の被差別身分史・賤民史の研究も、「近現代部落史」研究の一〇倍以上の論文が主要な学会誌に発表されている。このように、いまだ「近現代部落史」研究は発展途上の分野なのである。

さて、論文をよんでいくと聞いたことのない非常にマイナーな人物や用語がたくさん出てくるだろう。そんな時は『国史大辞典』（吉川弘文館）、これにも載っていないようなものは、『部落問題・人権事典』（部落解放・人権研究所、二〇〇一年）をあわせて、参考にしながら読んでいこう。人名の場合は『近代日本社会運動史人物大事典』全五巻（日外アソシエーツ、一九七七年）も併読すると便利だろう。但し、アナキズム関係は『日本アナキズム運動人名事典』（ぼる出版、二〇〇四年）が現在の最高水準を示している。この事典の訂正や追補は『トスキナア』（皓星社、現在九号まで刊行されている）という雑誌に順次掲載されている。これらの参考文献などを参照しつつ、読み進めてみよう。

(続く)

地方在住の私にとって、京都は歴史研究が盛んな土地であり、当資料センターはじめ部落問題関係の研究機関の充実ぶりには、目を見張るものがある。幸運なことに私はこの数年来、毎月、京都で開催される部落史の研究会に参加させていただいている。その際、近辺の図書館めぐり、資料調査をすることが大きな楽しみになっている。そしてこの間、私が各所で調べ続けてきた事柄に、水平社の組織名称の由来にまつわる問題がある。

水平社という組織名称は、創立メンバーの阪本清一郎が付けたものとされる。水平社宣言を執筆した西光万吉は、その名称について次のように述べている。「当時英国の農民運動にレヴェエラース (Leveers) というのがありました。その話が出て、いゝぢやないかということになったわけです。水平社が農民運動と関係が深かったことも、社会主義的であったのもこれでお判りだと思います」(『座談会・水平社創立の思い出を語る』『部落問

題研究』第一巻第二号、一九四九年)。こうした証言から、水平社の組織名称はしばしば一七世紀の英国のピューリタン革命におけるレヴェエラースに由来するといわれることがある。

しかし、この点については検討しなければならぬ重大な問題が横たわっている。それは名付け親である当の阪本が、命名について次のように証言していることである。「水平社とは、中世イギリスの農民運動団体レベラースの焼直しのやうであるが、実は筆者がたまたま頭に浮むだまに仮に名づけたのが後に全国的創立委員会と大会の承認を経たものである」(阪本『扉を開く』全国水平社大島支部、一九三五年)。その後、阪本は水平社の名称について、あくまでも自身の発意によるものであることを強調している(福田雅子『証言・全国水平社』日本放送出版協会、一九八五年)。

の命名にまつわる「謎」といってよい。しかし、全国水平社の創立趣意書「よき日のために」(一九二二年)には、後半部分で、翌年の全水創立大会への参加を呼びかけた箇所には次の文章がある。「私共は彼のレヴェエラースから思ひ付いた様な名の此の結社を利己的人種平等案のカリケチュアであり階級闘争中の悲喜劇である、この仕事をポンチのドン気だと笑の中の葬られはせぬかを気遣ひます」。こうした記述からも、水平社の創立メンバーが準備段階においてレヴェエラースを認識しており、この運動に敬慕の念を抱いていたことは事実とみてよいように思われる。また命名に際して、レヴェエラースの存在が多少なりとも意識されていたことが窺われる。そこで組織名称の由来を離れても、彼等がレヴェエラースについてどのような知識を持っていたのかを究明することは、水平社創立の一側面を明らかにすることに繋がるであろう。

\* \* \*

レヴェエラースとは、一六四〇〜一六六〇年のイギリス・ピューリタン革命に登場する急進派のことで、「平等派」「水平派」ともいわれる。この組織を支持したのは、口

ンドンの手工業者や職人層、軍隊の下士官や一般兵士たちであった。彼らは革命の推進勢力としてクロムウエル率いる独立派と共に戦い、議会内の長老派を追放した。またリルバーンをはじめとする指導者たちは、革命の過程に「人民協定」という憲法草案を提出し、人民主権の共和国構想を主張した。しかし次第にレヴェラーズは自らが要求する選挙権拡大などをめぐって独立派への批判を強め、対立を深めてゆく。そしてチャールズ一世を処刑した後、クロムウエルは反動に転じ、両派の同盟は解体される。リルバーンら指導者はクロムウエルによつて弾圧され、レヴェラーズはわずかな期間でその活動を終えたのである。

では一九二二年の水平社の創立当時、このレヴェラーズはどのような運動として認識されていたのだろうか。これは日本におけるイギリス史やピューリタン革命の受容、研究とかわかる問題である。明治期の日本の知識人によるピューリタン革命の紹介とその影響については、今井宏氏の詳しい研究がある（『明治日本とイギリス革命』ちくま学芸文庫、一九九四年、初版一九七四年）。同書には当該期のイギリス史関係の著作年表が付されている。これに従って調査したところ、レヴェラーズへの言及が確認でき

るもっとも早い書物として、一八八五年に佐藤覚四郎が訳したF・ギゾー（一七八七～一八七四年）の『英国革命史』（開天社）がある。

ギゾーはフランスの政治家、歴史家で、代表的な著作『ヨーロッパ文明史』（一八二八年）がある。同書は、この書に影響を受けた福沢諭吉が『文明論之概略』（二八七五年）に著したこと知られる。この『英国革命史』においてきわめて小さな扱いではあるが、国王処刑後にクロムウエルによつて弾圧された反対勢力のひとつに、「平権党」としてレヴェラーズの名前が登場している。

次にレヴェラーズへの言及が確認できるのは、竹越与三郎『格朗空』（一八九〇年）である。竹越は自由民権運動期に「平民主義」を掲げて言論を張った民友社の同人で、当時、著名な民間史家であった。同書のタイトルはクロムウエルの読みの宛て字であり、今井氏が「当時のイギリス革命研究の成果を正確に反映し」たものと評するように、クロムウエルを中心とした革命の過程を詳しく記している。同書ではレヴェラーズを「平等派」と表し、その主張と活動、クロムウエルによる弾圧の経緯についても紹介している。管見によると明治期にレヴェラーズについてまとまった叙述がなされたのは、

この書物が最初のようである。また当該期のレヴェラーズに言及した邦語文献としては、最も詳しい内容といえよう。

今井氏が述べるように、明治期の知識人のイギリス革命への関心は、近代国家の形成に向かう日本の範として、まず一六八八年の名誉革命以来の国王と議会の「成熟した」関係の伝統とその形成に向けられた。その文脈で翻訳されたギゾーの著作において、はじめてレヴェラーズが日本に伝えられたのである。次に自由民権運動期には「国権」対「民権」の対立が全面化し、その関心はピューリタン革命にまでさかのぼることになった。そして竹越の著作のように、国王の暴政を阻止したクロムウエルの顕彰や、正義を実現したピューリタンの信仰へと移っていく。

しかし明治期を見渡すとき、こうした少数の著作の他には、レヴェラーズへの言及はほとんどみられない。当該期の知識人の関心は、ピューリタン革命を断行したクロムウエルに向かうに留まったといえる。彼に弾圧されたレヴェラーズ思想や活動そのものに関心が集まるには、まだ時代が早かったのである。

\* \* \*

大正に入ると、レヴェラーズの名前とその活動を広めるきっかけとなる二冊の訳本が出版され、こうした状況に変化が生じてくる。

その二冊とはカーライル『クロムウエルの書翰と演説』（原著、一八四五年）とエンゲルス『空想から科学へ』（原著、一八八〇年）である。カーライル（一七九五～一八八一年）は、イギリスの批評家、歴史家である。今井氏によると、カーライルは中村正直のベストセラー『西国立志編』（二八七〇～七一年）で紹介されたことなどから、日本でもよく知られた存在であった。また単に著名であるだけでなく、当該期の日本の知識人に多大な影響を及ぼしている。例えば内村鑑三は『クロムウエルの書翰と演説』をつうじてクロムウエルに感銘を受け、以後、自身のピューリタンとしての生き方の範とするようになる。一八九一年の教育勅語奉読式におけるいわゆる「内村鑑三不敬事件」は、国王の権威を拒否したクロムウエルの態度に影響を受けたものであった。つまり内村のその後の人生を決定づけたこの事件のきっかけに、同書との出会いがあったのだという。

夏目漱石もまたカーライルを深く敬愛した知識人であった。漱石はロンドン留学時代（一九〇〇～〇三年）にテムズ河畔チェルシーにあつ

たカーライルの旧居（カーライル博物館）を四度にわたって訪れている。さらに博物館に所蔵されているカーライルの蔵書三百冊余りの書名を筆写し、「カーライル蔵書目録」として日本の雑誌に発表している。このように当時の知識人がカーライルに対して異常ともいえるほどの傾倒ぶりを示していたことが知られる。

さて本稿のテーマであるレヴェエラーズの紹介という観点に立ち戻り、『クロムウエルの書翰と演説』が果たした役割について考察してみたい。同書はまず一九一三年に『クロムエル伝』（畔上賢造訳、警醒社書店）として、次いで一九一八年に『オリヴァ・クロムウエル』（戸川秋骨訳、実業之日本社）として、さらに一九二六年『オリヴァクロムウエル』（柳田泉訳、カーライル全集、第七、九巻、春秋社）として、三度にわたって翻訳された。カーライルは「世界の歴史はその根底においては英雄の歴史である」と唱える立場をとる。そして同書ではピューリタンの戦士であるクロムウエルの書翰と演説に自身のコメントを付け、闊達な筆致で歴史叙述を展開している。またレヴェエラーズの主張と行動についても、竹越の著作以上に多くの紙数を費やし、クロムウエルとの間に確執を生み、遂に弾圧されるに至る過程を共感

を込めて描いている。

ただしその際、カーライルが描くレヴェエラーズ像は今日の一般的な理解とは基本的な点において大きく異なっていることを指摘しなければならぬ。同書はレヴェエラーズの活動を、（リルバーンではなく）ウインスタンリなる人物の理念と指導のもとに叙述している。ウインスタンリはレヴェエラーズと同時にクロムウエルに弾圧されたことで知られる最左翼の急進派である。彼は神秘主義的ユートピア思想に基づいて農民を率い、土地私有制や財産権を否定するなどの主張を繰り広げた。こうした活動から、空想的社会主義の一例とされることもある。

本書において、ウインスタンリからは自らを「ユダヤ人の系統に属す」と名乗り、「起て、地を掘つてこれを耕せ、而してその果実を受けよ」との夢想が現れたと主張したとされている。さらに「大地の果実を享受する古の共産社会を復活せしめ、その幸福を貧窮なる者、必要な者に分ち、餓死たる者に食はしめ、衣無き者に與へん」、「やがて凡ての人々が自分から進んでその土地と財産を棄て、来たり投じ、此の財産共有社会に従ふ時が来るであろう」と唱えたのである（柳田訳）。

今日ではこの農民運動はデイガー

ズ（掘り耕す人たち）と呼ばれ、リルバーンらが率いた、ロンドンの中・下層市民や軍隊の下士官らを基盤とするレヴェエラーズとは異質な運動とされるのが一般的である。レヴェエラーズは農業問題、土地問題にたいする政策を本格的には掲げたことはなかった。またリルバーンはデイガーズの唱えた私有財産制の廃止について、「滑稽でばかげた考え」としてこれを斥け、絶えず一線を画していたのである（若原英明『イギリス革命史研究』未来社、一九八八年）。それにもかかわらずカーライルがデイガーズの活動をレヴェエラーズの運動と見なした理由は、ウインスタンリがレヴェエラーズの活動を不徹底であると批判し、自ら「真のレヴェエラーズ」（*True Levellers*）を名乗ったからと推定される。

西光万吉の没後、夫人の清原美寿子氏によって編まれた『西光万吉蔵書目録』（一九八七年）によると、西光の蔵書には一九二六年の柳田訳が含まれている。先にみたように、後の西光や阪本がレヴェエラーズを中世イギリスの農民運動と理解していたことと合わせれば、同書におけるレヴェエラーズの叙述が彼らに少なからず影響を及ぼしたということが出来る。ただし西光が所蔵していたのは水平社の結成後の刊行本である。しかし著者

カーライルの当時の知名度などから考えれば、創立メンバーたちは当初から何らかの経緯で同書の翻訳に触れ、レヴェエラーズについての知識やイメージを得ていた可能性が高いと思われる。

\* \* \*

さてカーライルは本書で、レヴェエラーズの本質を、その最も純化された形態として「真のレヴェエラーズ」を名乗ったデイガーズに求める理解を示した。こうした態度は、その後広く行き渡り、昭和戦前期にかけて一般化したものと思われる。その普及を後押したのが、もう一冊の本、エンゲルス（一八二〇〜一八九五年）の『空想から科学へ』である。

エンゲルスは、同書でプロレタリアートによる社会変革の方法を明らかにしようとした。すなわちサン・シモン、フーリエ、オーエーンらを空想的社会主義と呼び、それらを評価しつつも資本主義社会に対する変革手段を見出せなかつたと指摘した上で、それとの対比によってマルクスが発展させた科学的社会主義を解説した。同書は各国で翻訳され、世界中でマルクス主義の入門書として読まれたことで知られる。日本でも一九〇六年に堺利彦によって『社会主義研

究』誌に翻訳されて以来、数度にわたって訳出され、水平社創立の前身には、『空想的及科学的社会主义』(一九二一年、大鑑閣)として単行本化された。

同書でエンゲルスは、レヴェラーズをブルジョワ革命時に現れた先駆的なプロレタリア階級の独自の闘争事例として紹介している。その際、堺は一九一八年に訳出した『空想的及科学的社会主义』(『新社会』第四卷第六号、一九一八年三月)以来、一貫してレヴェラーズに「一七四〇年のアイルランド農民の一揆」と訳注を付している。が、これは明らかな誤りである。ただしここでもこの運動を農民運動と説明していることについては注意したい。

木村京太郎は全国水平社創立の直後から西光と深い親交をもつなかで、社会主義関係の図書を薦め与えられたと回想し、そのうちの一冊に『空想から科学へ』を挙げている(『水平社運動の思い出』下、一九七三年)。またそのなかで西光は木村に対し、空想的社会主義から科学的社会主義へという同書の主題を説いて聞かせたと述べていることから、創立時に西光は堺の訳本を熟読していたようである。さらに西光や阪本、駒井喜作らは水平社の準備段階で堺利彦や佐野学など社会主義者のもとに「下相

談」に訪れたとされる(拙稿「初期水平運動と佐野学 史料紹介「水平運動」(佐野学)」「部落解放研究」第一八三号、二〇〇八年一〇月)。これらを総合すれば、創立関係者のレヴェラーズに関する知識が、堺を介してもたらされた可能性も高いと考えることができよう。

さて同書でエンゲルスはレヴェラーズについて「ブルジョワ革命時に現れた先駆的なプロレタリア階級の闘争事例」と説明した。エンゲルス執筆当時のレヴェラーズ研究の状況(川村大善『人民協約の研究』弘文堂、一九六二年を参照)を踏まえれば、これは多分に先のカーライル『クロムウエルの書翰と演説』におけるレヴェラーズ理解を引き継ぎ、デイガーズを念頭に置いて言及したものと推定できるのではないだろうか。

エンゲルスと親交のあったベルンシュタインは一九一五年に『新社会主義の先駆者』(未邦訳)を著わした。同書でベルンシュタインはウインスタンのパンフレットなど多くの新資料を発掘して紹介し、今日に至るデイガーズの研究の先鞭をつけたといわれる。その際、彼はレヴェラーズの活動の頂点にデイガーズを位置づけ、先駆的なユートピア的社会主義運動としてこれを位置づけている(川村前掲書)。その構成はカーライルのレ

ヴェラーズ理解をエンゲルスの理論的枠組みのもとに整序し直したものと見える。

\* \* \*

こうした社会主義的な歴史認識にもとづくレヴェラーズ理解は、日本においても昭和戦前期にかけて一般化していった。波多野鼎「英国の平等党の思想」(『社会思想』第四卷第一〇号、一九二五年)は、管見によると戦前期の日本で発表された唯一のレヴェラーズの研究論文である。同論文において波多野は、レヴェラーズを「現代プロレタリア階級の先駆者たる階級の独自のなる運動」と位置づける。また「レヴェラーズの共産主義的思想を典型的に代表するものはウインスタンレーである」とし、デイガーズの思想について詳述している。

また群を抜く詳細さで総合辞典の権威とされた『社会科学大辞典』(改造社、一九三〇年)の「レヴェラーズ」の項目でもデイガーズを取り上げ、これを「真正なるレヴェラーズ」、また本来のレヴェラーズを「政治的レヴェラーズ」と位置づける。そして前者は後者と「根底を同じ所より発し、ただその表現の異なる一派」と説明している。また同辞典でリルバーン

は名前すら挙がっていない。これに対し、「デイッガーズ」と「ウインスタンレー」については独立した項目が立てられ、その思想は「空想的共産主義の顕著なる一例」であり、「大革命時に於ける最も著しい社会的所産」とされている。

これまでの検討から、昭和戦前期においては、レヴェラーズは科学的社会主義に先行して存在した空想的社会主義の事例として注目されたことがわかる。戦後の回想において西光が水平社の名称の由来としてレヴェラーズに触れ、これを「社会主義的」な「英国の農民運動」と述べた際も、念頭に置かれていたのはデイガーズの運動だったと推定されるのである。また水平社の創立準備段階において、すでにレヴェラーズに関するこうした認識やイメージを保持しており、それが冒頭でも触れた水平社創立趣意書「よき日の為めに」における言及につながったと考えることもあながち無理とは言えないように思われる。

以上の考察はこれまでの資料調査にもとづいて考えた仮説に過ぎない。見落としてしまった文献があるかもしれないと思いつつ、敢て現段階の認識を提示した次第である。多くの方のご教示を乞いたい。

能性『大阪の部落史』近世編（第1巻～第3巻、第9巻）  
を読んで 吉田勉／一地域の部落史をこえた存在 『大阪  
の部落史』近代・現代編（第4巻～第9巻）を読んで 吉  
田文茂

ピリカピリカ 12 血による差別の論理 多原香里

本の紹介 『透徹した人道主義者 岡崎精郎』（吉田文茂  
著） 関口寛／『学問の暴力—アイヌ墓地はなぜ暴かれ  
たか』（植木哲也著）／『学力と階層—教育の綻びをど  
う修正するか』（荻谷剛彦著）／『心はなぜ不自由なの  
か』（浜田寿美男著）／『エル・システム—音楽で貧困  
を救う南米ベネズエラの社会政策』（山田真一著）／  
『カムイ伝講義』（田中優子著）／『教員のための子ども  
の虐待理解と対応—学校は日々のケアと予防の力を持つ  
ている』（岡本正子、二井仁美、森実編著）

差別する意思がなければ差別でないのか 滋賀県東近江  
市民による「同和地区間い合わせ差別事件」 丸本千悟  
部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 15 第2章 長  
吏・かわたの仕事と役割をめぐって 10 補論 なぜ生業・  
分業を問うのか 藤沢靖介

**部落解放 614号**（解放出版社刊，2009.5）：1,050円

人権キーワード2009

**部落解放 615号**（解放出版社刊，2009.6）：630円

特集 子どもの貧困 「子どもの権利条約」から20年を経  
た日本

本の紹介

『解放の花を咲かせよう 材木貞子の記録』（松崎一編）  
堀内忠／『この子らに民族の心を 大阪の学校文化と民  
族学級』（朴正恵著） 野入直美

インタビュー 朝鮮人強制連行を現物で伝えつづけて 丹  
波マンガン記念館の20年 李龍植

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 16 第3章 近  
世における社会的地位 藤沢靖介

**部落解放研究 185**（部落解放・人権研究所刊，2009.4）：  
1,000円

特集 隣保館機能の継承・発展

明日の隣保館を創造する 大北規句雄／全隣協「あした  
の隣保館」をつくる—『あしたの隣保館検討委員会報告  
書』より 伊藤勝彦／隣保館の公共性と指定管理者制度  
中川幾郎

堺県の辛未戸籍と三昧聖—明治4年5月の三昧聖仲間の嘆  
願書を中心に 北崎豊二

スコットランドにおけるコミュニティ・スクール ハヤ  
シザキ カズヒコ／レイチェル・ウィンター

フリーター「選択」と自尊感情・職業意識—「高校生の  
生活と進路意識調査」から（3・最終） 内田龍史

資料紹介 松本治一郎記念会館旧蔵資料—松本治一郎関  
係書簡・資料から（その9・最終） 本多和明

書評

志水宏吉編著『高校を生きるニューカマー 大阪府立高  
校にみる教育支援』 太田晴雄／池田賢市編著『法教育

は何をめざすのか「規範教育」か「主権者教育」か』  
中原朋生／島博之著『ネパールの被抑圧集団の教育問題』

山本愛／布施哲也著『官製ワーキングプア 自治体の非  
正規雇用と民間委託』 平尾和／寺木伸明・藤沢靖介監  
修『街道絵図に描かれた被差別民「五街道分間延絵図」  
解説篇補遺』 小野田一幸

**部落解放研究くまもと 57号**（熊本県部落解放研究会  
刊，2009.3）

部落差別の現実と課題：最近の差別事件と私の経験から  
花田昌宣

江戸時代の三昧聖・葬儀屋と葬送文化 木下光生

在日コリアンの群像—日韓の狭間をいきる— キム ソン  
ヒョ

**部落問題研究 187**（部落問題研究所刊，2009.2）：1,1  
11円

大阪府泉北地域における勤評闘争の展開 森下徹  
書評

佐賀朝著『近代大阪の都市社会構造』 飯田直樹／尾川  
昌法著『人権のはじまり—近代日本の人権思想』 岩村  
等

史料紹介 京都におけるアメリカ軍政と学制改革 竹末勤

**部落問題研究 188**（部落問題研究所刊，2009.3）：1,1  
11円

座談会 戦後日本の思想的動向と部落問題

報告1 山科三郎 日本の戦後思想の史的展開過程／報告2  
日隈威徳 戦後の仏教界の動向と部落問題／討論 山科  
三郎・日隈威徳・広川禎秀・鈴木良・成澤榮壽

鳥取県人権侵害救済条例をめぐって—「条例」を必要と  
する根拠は存在したのか— 奥山峰夫

書評 佐々木隆爾著『新安保体制下の日米関係』，『占  
領・復興期の日米関係』 伊崎文彦

**マイノリティ研究 創刊号**（関西大学マイノリティ研  
究センター刊，2009.3）

台湾における中国人配偶者の法的地位—政治に揺れるマ  
イノリティの権利— 呉煜宗

The Relationship between Constitutional and Intern  
ational Devices to Protect Minority Rights by Thom  
as Ginsburg

The Emergence of Ainu Subjectivity and the Discour  
se on Japan's National Identity by Alexander Bukh  
自治州国家と重層的アイデンティティー—サパテロ政権下  
のスペイン政治 松森奈津子

国際法学におけるマイノリティ研究の動向 桐山孝信

Civic Engagement and Political Education of Young  
People by Murray Print

インド憲法における「宗教の自由」とインド刑法の「礼  
節および道徳…に関する罪」および「宗教に関する罪」  
について 1—マイノリティの宗教的権利考察の前提とし  
て 孝忠延夫

50円

シンポジウム 水平社宣言から継承するもの・水平社宣言から創造するもの パネラー 朝治武・守安敏司・花井十伍・森下光泰

人権文化を拓く142 破れ太鼓の発見から 人と人をつなぐ 小久保信蔵

**であい 566** (全国同和教育研究協議会刊, 2009.5) : 150円

シンポジウム 水平社宣言から継承するもの・水平社宣言から創造するもの 2 パネラー 朝治武・守安敏司・花井十伍・森下光泰

人権文化を拓く 142 豊かな生と性を考える授業を！—「引き揚げ港・博多」の授業化の試み— そのだひさこ

**どの子も伸びる 403** (どの子も伸びる研究会刊, 2009.5) : 735円

「どの子研」を生んだ教育実践 下—生活綴方と集団の教育と文学の授業の結合— 東上高志

「人権教育」批判 「人権教育」の内容の問題点—「人権教育の4つの側面」— 谷口幸男

**どの子も伸びる 404** (どの子も伸びる研究会刊, 2009.6) : 735円

「人権教育」批判 文科省がすすめる「人権教育」—「第三次とりまとめ」の問題— 谷口幸男

**奈良県立同和問題関係史料センター研究紀要 15号** (奈良県立同和問題関係史料センター刊, 2009.3)

『明治之光』の復原と基礎的研究 井岡康時

明治期被差別部落における知的世界の境域—中村諦梁と内村鑑三とその周辺— 奥本武裕

中世興福寺「盲目」の考察—正月参賀を題材として— 山村雅史

宝暦元年南里村氏神神体勧請一件覚書—夙村と土御門家— 吉田栄治郎

民俗学から見た大和のムラ 市川秀之

**奈良大学人権教育研究 6** (奈良大学人権委員会刊, 2009.3)

講演録 近代部落問題の形成 小林文広

空間的隔離とゲッター 文献解題 3 元濱涼一郎

**ねっとわーく京都 245** (ねっとわーく京都21刊, 2009.6) : 500円

とーく 新しい丹波マンガ記念館に向けて 李龍植・細川孝

**はらっぱ 295** (子ども情報研究センター刊, 2009.5)

外国籍教員の現状を知るひとつの事例をめぐって

**はらっぱ 296** (子ども情報研究センター刊, 2009.6)

特集 「子どもの貧困」をめぐって私たちが感じる“モヤモヤ”

日本の子どもの貧困 阿部彩／お金がなくても高学歴でなくても、子どもが健やかに暮らせる社会を 大森順子／「正しい貧困」を探せなくて 近藤亜矢子／価値観や生き方を無視したレッテル貼りは真っ平ゴメンだ 社納

葉子

**ヒューマンライツ 253** (部落解放・人権研究所刊, 2009.4) : 525円

部落解放・人権研究所40年の歩み 7 『大阪の部落史』全10巻の完結、若手研究者の国際ワークショップの開催 友永健三

ジェンダーで考える教育の現在 27 セクシュアル・ハラスメントのないキャンパスをめざして 吉野太郎

参加型で学ぶ部落問題学習 カムアウトをテーマに教材開発—2007年度解放大学ゼミナールコースより 許輝子 書評 金泰明著『欲望としての他者救済』 「私はなぜ人助けをするのか」を振り返る手引き 李嘉永

**ヒューマンライツ 254** (部落解放・人権研究所刊, 2009.5) : 525円

グーグル・ストリートビュー—何がどう問題なのか 園田寿

<差別の日常>の解読の仕方—倉石一郎さんにきく

**ヒューマンライツ 255** (部落解放・人権研究所刊, 2009.6) : 525円

部落解放・人権研究所の改革に向けて 「部落解放・人権研究所改革方策」策定の経緯とその概要 寺木伸明 書評 『「インターネットと人権」を考える ネット社会を生き抜くために』 吉村憲昭

**ひょうご部落解放 132** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2009.3) : 700円

特集 国連自由権規約「勧告」の具体化に向けて

人権の「底抜け」を再考する—わたしと、自由と、モノ言うこと— 阿久澤麻理子／自由権規約第5回日本報告書

審査—審査の模様と最終見解— 小笠原純恵／「日本軍慰安婦」問題、宝塚市議会の取り組み 梶川みさお／難

民学生の就学支援—関西学院大学の取り組み— 浅野考平／子どもの平等と国籍法—日本人父の婚外子の日本国籍

取得をめぐって— もりきかずみ／外国人の児童生徒の教育保障—「朝鮮学校」に対する平等な扱いを求めて

吉井正明／外国にルーツをもつ子どもの教育問題 金宣吉／同性カップルに異性カップルと同じ権利を認めること

有田匡／国籍による差別廃止を求め—教員の差別待遇から— 辻本久夫／国連自由権規約委員会勧告 在日

無年金問題 鄭明愛 対岸の肖像～BURAKUとのかけ橋～ 13名と一組のメッセージ スライド上映、トークセッション

本の紹介 『対論 部落問題』 (組坂繁之・高山文彦著) 竹本貞雄

／『アイヌ民族の歴史』 (榎森進著) 兵藤宏／『北の彩時記 アイヌの世界へ』 (計良光範著) 竹本貞雄

**部落解放 613号** (解放出版社刊, 2009.5) : 630円

特集 『大阪の部落史』完結！ 座談会 部落史研究の新たな発展にむけて 『大阪の部落史』の編纂にかかわって 井上満郎, 布引敏雄, 寺木伸

明, 北崎豊二, 渡辺俊雄／構造的・動的な部落史の可

**人権と部落問題 786** (部落問題研究所刊, 2009. 4) : 630円

特集 主権者を育てる教育

文芸の散歩道 『破戒』の結末にみるテキサス行きの系譜 川端俊英

**人権と部落問題 787** (部落問題研究所刊, 2009. 5) : 630円

特集 今日の憲法問題

随想 『破戒』の発売元 上田屋書店 帆足正規

文芸の散歩道 竹内勇太郎著『飛驒の女』一疎外・差別に抗して闘達に生きた女性像— 桑原律

**人権と部落問題 788** (部落問題研究所刊, 2009. 6) : 630円

特集 同和行政・同和教育の終結—福岡県の場合

京都市総点検委員会の審議と結論 井関佳法

文芸の散歩道 松山で発見した北原泰作の短編小説「復讐」 秦重雄

**じんけんぶんかまちづくり 23号** (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2009. 6)

不安をおおる「新型インフルエンザ」報道への違和感 西村寿子

レポート 第4回「部落問題は今、研究会」 「にくのひと」上映と制作者満若勇咲さんの話

**季刊人権問題 355**(兵庫人権問題研究所刊, 2009. 4) : 700円

兵庫県における民主主義と人権に生涯を捧げた人々 差別の厳しい時代に部落解放運動に貢献された橋本勇さん 松下修治

**人権問題研究 31** (大阪市立大学人権問題研究会刊, 2009. 3) : 1,500円

プレシグルマザーを可視化する～彼女らのニーズと支援の必要性 中野冬美

市町村行政における児童虐待防止対応の課題～子どもの人権の視点に立った家族援助とは～ 栄留里美

阪本数枝にみる水平社とジェンダー 大賀喜子

国際結婚家族の子どもたちの「声」—カテゴリー、エスニシティ、アイデンティティ— 森川与志夫

ナショナリズムの狭間から—「慰安婦」問題へのもう一つの視座— 山下英愛

ベーシックインカムの可能性 山森亮

**人権問題研究別冊** (大阪市立大学人権問題研究会刊, 2009. 3) : 1,500円

資料集 上田静一と被差別部落—明治・大正期を中心に—

田中親友夜学校と上田静一 白石正明／京都・田中部落の改善運動と上田静一 朝治武／北海道移住と上田静一 大藪岳史

**信州農村開発史研究所報 104・105号** (信州農村開発史研究所刊, 2008. 9)

「長野県部落問題関係記事概要 (1912年～1944年) —

「朝倉重吉資料」 「長野県部落史調査委員会資料」を手がかりに—」を读了して 日野勝

「長野県部落問題関係記事概要」こぼれ話 (その1) 川向秀武

中村かくさん のこと—初めて「信州研」を訪ねて 平野一郎

資料・信州『破戒』の町

**水平社博物館研究紀要 11号** (水平社博物館刊, 2009. 3) : 1,000円

全国水平社少年代表 山田孝野次郎の生涯 仲林弘次  
1920年代の融和運動における演劇活動についてのノート—「因襲の幽霊」をめぐる顛末から— 本郷浩二

**月刊スティグマ 153** (千葉県人権啓発センター刊, 2009. 3) : 500円

特集 水俣・千葉展から水俣へ

**月刊スティグマ 155** (千葉県人権啓発センター刊, 2009. 5) : 500円

特集 隔離差別教育とたたかう

**月刊スティグマ 156号** (千葉県人権啓発センター刊, 2009. 6) : 500円

明治維新後遺症としての日本人…差別問題をすべての人のものにするための試論 1 「差別する側」こそ「反差別の一番の担い手」 鎌田行平

**聖母女学院短期大学研究紀要 第38集** (聖母女学院短期大学刊, 2009. 4)

人権教育の一指導法について 小林玲子

**月刊地域と人権 302** (全国地域人権運動総連合刊, 2009. 4) : 350円

講演 現段階の部落差別をみる～そもそも部落差別、部落問題とは～ 奥山峰夫

**月刊地域と人権 303** (全国地域人権運動総連合刊, 2009. 5) : 350円

広島の人権教育」は今 今谷賢二

**月刊地域と人権 304** (全国地域人権運動総連合刊, 2009. 6) : 350円

故石岡克美顧問を偲んで～運動の継承を願う立場から～  
**地域と人権京都 551号** (京都地域人権運動連合会刊, 2009. 6. 15) : 150円

現段階の部落差別をみる 「そもそも部落差別、部落問題とは」 1 奥山峰夫

**ちくま 457** (筑摩書房刊, 2009. 4)

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 23 第6章 激動と苦闘=30年の生涯 1 沖浦和光

**ちくま 458** (筑摩書房刊, 2009. 5) : 100円

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 24 第6章 激動と苦闘=30年の生涯 その2 沖浦和光

**ちくま 459** (筑摩書房刊, 2009. 6) : 100円

青春の光芒—異才・高橋貞樹の生涯 25 第6章 激動と苦闘=三十年の生涯 3 沖浦和光

**であい 565** (全国同和教育研究協議会編, 2009. 4) : 1

文化史研究と芸能史研究 川嶋將生／1950年代と林屋史学 村上紀夫／「戦国時代の祇園祭」論—豊かなイメージと史実の間隙— 河内将芳／室町仏教と芸能・談義 原田正俊／一つ物研究のはじまり—馬長研究との交差— 福原敏男

**コア・エシックス 5** (立命館大学大学院先端総合学術研究科刊, 2009. 3)

明治期の土木建設業と「朝鮮人」労働—京釜鉄道建設と日本土木建設業の進出— 大村陽一

京都における公設浴場の設置過程及び運営に関する考察 川端美季

斬首を伴う「死刑執行人」の配置に関する考察—公事方御定書から旧刑法にいたるまで— 櫻井悟史

翻訳者としての知里真志保—アイヌ神謡と詩— 佐藤＝ロスベアグ・ナナ

「男女平等」を拒否する「女解放」運動の歴史的意義—「男女雇用平等法」に反対した京都のリブ運動の実践と主張から— 村上潔

差別の社会理論における課題—A. メンミとI. ヤングの検討を通して— 山本崇記

アメリカバークレー市における障害者自立生活—1989年の障害者自立生活者を事例として— 定藤邦子

**こべる 193** (こべる刊行会刊, 2009. 4) : 300円

最近読んだ本から 18 紋切り型の「在日」論を乗り越えるために—小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』 高田嘉敬

部落のいまを考える 108 お気楽な「放談」に終始する理由が知りたい—組坂繁之・高山文彦『対論 部落問題』を読む 佐々木寛治

いのちを生きる 18 あきらめないぞ! 長谷川洋子

映画の現場—写真と文 小林茂

**こべる 194** (こべる刊行会刊, 2009. 5) : 300円

尼崎だより 30 介護施設の今(続)—生活のバリエーションを豊かに 中村大蔵

播州からの便り 1 「親密な関係」にひそむもの 福岡ともみ

四日市から 17 いのちをかこむ 坂倉加代子

いのちを生きる 19 三度は負けない! 長谷川洋子

映画の現場—写真と文 小林茂

2008年度『こべる』会計報告

**こりあんコミュニティ研究会通信 創刊号** (こりあんコミュニティ研究会刊, 2009. 5)

和歌山県新宮市のある在日の軌跡 その1 水内俊雄

桜ノ宮龍王宮の報告 1 全泓奎

桜ノ宮龍王宮の報告 2 黒木宏一

**雑学 35号** (下之庄歴史研究会刊, 2009. 5) : 800円

若き作家へ—「十年」「殴る日まで」「糸と糸」— 守安敏司

「国民」という語のイデオロギー 吉田智弥

「大逆事件」ノート 金井英樹

異能者論概括 上野茂

中上健次私論ノート20 高桑健二

三輪山祭祀と大物主・大己貴神の理解のために 辻本正教

**試行社通信 272号** (八木晃介刊, 2009. 6)

部落解放運動の行方

**しこく部落史 11号** (四国部落史研究協議会刊, 2009. 6) : 500円

シンポジウム「四国の融和運動」

1920年代高知県の融和運動素描 吉田文茂／香川県における融和運動 山下隆章

高知県における部落経済更生運動の展開 吉田文茂

香川の部落改善事業を推進した知事 若林資蔵

天狗久『人形細工控帳』から 辻本一英

中江藤樹の人間平等論—幕藩体制の支配イデオロギーへの反旗— 五藤孝人

人物紹介 婦人融和運動家 久保つるの取り組み 武知忠義

書評

吉田文茂著『透徹した人道主義者 岡崎精郎』 山下典昭／辻本一英著『阿波のでこまわし』 五藤孝人

**じんけん 337** (滋賀県人権センター刊, 2009. 5) : 350円

特集 部落史の掘りおこしと学び

部落史の編纂と活用 亀岡哲也／自治体史編さん事業から「人権・同和問題」を学ぶ 上田喜江

じんけんフォーラム 38 部落女性にとっての「生殖」

「再生産」 熊本理抄

**じんけん 338** (滋賀県人権センター刊, 2009. 6) : 350円

特集 地域の部落史に学ぶ

近江における牛馬関連の仕事 亀岡哲也／忘れられていた滋賀の水平社運動 武田一夫

**人権21 調査と研究 199** (おかやま人権研究センター刊, 2009. 4) : 650円

特集 新しい出発—研究所の解散にあたって

**人権教育研究 17号** (花園大学人権教育研究センター刊, 2009. 3)

地べたのコミュニスト福本正夫 吉田智弥

エイズをめぐる不可視性の多重的構造—「レズビアン」をキーワードに— 堀江有里

共犯者の供述から殺人の共謀を認定された事案 脇中洋 裁判員制度における障害者への配慮に関する一考察 慎英弘

「九相詩」の現代 島崎義孝

差別とは何であって、何でないのか 八木晃介

「できる人」に仕事は集まるが、「消えゆく人」も仕事を 安田三江子

研究ノートの覚書のようなもの「私的、今は昔のメモリアル」

6—障害者市民、かく闘えり!— 河野秀忠

**解放新聞三重版 279号** (解放新聞社三重支局刊, 2009.5)

格差・貧困・失業の中で 労働運動から解放運動へ 1 藤村進さんに聞く

**解放へのはばたき 86** (日本基督教団部落解放センター刊, 2009.4)

特集 『同宗連』について 後編

**語る・かたる・トーク 170** (横浜国際人権センター刊, 2009.4) : 500円

わたしと部落とハンセン病 41 林力

信州の近世部落の人びと47 一把稲と旦那場19 齋藤洋一  
同和問題再考 100 差別の源流はインドに… 田村正男

部落差別の現実 81 人権・同和教育の現場 5 江嶋修作

**語る・かたる・トーク 171** (横浜国際人権センター刊, 2009.5) : 500円

わたしと部落とハンセン病 42 福岡市長選挙差別事件  
林力

信州の近世部落の人びと48 一把稲と旦那場20 齋藤洋一  
同和問題再考 101 「旃陀羅」だって人間だ! 田村正男

部落差別の現実 82 人権・同和教育の現場 6 江嶋修作

**カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター  
たより 16** (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動  
センター刊, 2009.4)

対話集会 「部落解放運動の提言」を読む 講師: 篠原誠,  
友永健吾, 住田一郎

**かわとはきもの 147** (東京都立皮革技術センター台東  
支所刊, 2009.3)

靴の歴史散歩 92 稲川實

正倉院と皮革 12 正倉院宝物に見る皮革の利用と技術 2  
一謎の多い技法の数々に感嘆— 出口公長

皮革関連統計資料

かわとはきもの博物館めぐり 4 袋物参考館 PRINCESS G  
ALLERY 福原一郎

**関西外国語大学人権教育思想研究 12** (関西外国語大  
学刊, 2009.3)

アジア諸国における権威主義開発体制と人権問題 内田  
智大

アイヌ民族と人権—法制度と行政の対応を中心に— 久  
禮義一

被疑者・被告人と人権—選挙違反事件を中心に— 久禮  
義一・平峯潤

発展途上国へのODA (政府開発援助) と人権—実務上の  
体験に基づく印象 船越博

児童労働撤廃に向けて—インドの現状 村田美子

**関西学院大学人権研究 13号** (関西学院大学人権教育  
研究室刊, 2009.3)

トランスナショナルな政策・実践学習プロセス—グロー  
バルな人権アドボカシーへの影響 On-Kwok Lai

エッジを歩く—手紙形式による差別論講義— 三浦耕吉  
郎

岩橋武夫研究覚書—その歩みと業績を中心に 室田保夫  
小島達雄教授とわたし 領家穰

「当事者」たちの多様な声—トークセッションから聴こ  
えてくるもの— 阿部潔

不況の中での外国人家族への支援 辻本久夫

**関西大学人権問題研究室紀要 57号** (関西大学人権問  
題研究室刊, 2009.3)

大坂町奉行所の刑事判例 1—大坂城代土屋氏御用留によ  
る— 藤原有和

アメリカ占領下の日本における人口問題とバースコント  
ロール—マーガレット・サンガーの来日禁止をめぐる—  
— 豊田真穂

資料の紹介とその概要 『The Nation』誌の記事「Japan  
's Untouchables」(「日本の不可触民」)と対訳  
(「外国人の見たる水平運動」)の紹介 宮橋國臣

**KG人権ブックレット 13** (関西学院大学人権教育研  
究室刊, 2009.3)

講演録

今、改めて人権について考える—世界人権宣言60周年を  
迎えて— 友永健三/世界はもっと豊かだし、人はもっ  
と優しい—不安と不信のスパイラルを抜け出すために—  
— 森達也

**季節よめぐれ 245号** (京都解放教育研究会刊, 2009.5)

格差を越える高校—西成高校が大切にしていること—  
— 山田勝治

**季節よめぐれ 246号** (京都解放教育研究会刊, 2009.6)

教育格差を乗り越える! ~解放教育の再構築をとおして  
~ 外川正明

**京都市政史編さん通信 34** (京都市市政史編さん委員  
会刊, 2009.3)

『京都市政史第1巻 市政の形成』発刊に際して 伊藤之  
雄

戦後初期における京都市失業対策事業と失対労働者に関  
する覚書 下 杉本弘幸

**京都市歴史資料館紀要 22** (京都市歴史資料館刊, 200  
9.3)

書評 叢書京都の史料10『近代自治の源流』を読む 奥村  
弘

**月刊きょうの論談 73** (論談社刊, 2009.4) : 500円

京都に生きて、京都を愛して 76 終結の方向に向かう  
「職員不祥事」 梶宏

**グローブ 57** (世界人権問題研究センター刊, 2009.4)

映画「おくりびと」の世界 関口寛

紹介 『京都と韓国の交流の歴史』(韓国民団京都府本  
部発行) 水野直樹

識字教室が大切にしてきたもの 岩槻知也

人権の“館” 東アジア交流ハウス雨森芳洲庵

**藝能史研究 183** (藝能史研究会刊, 2008.10) : 1,800  
円

特集 芸能史と文化史—林屋辰三郎没後十年—

ルの公教育化 奥地圭子

ぶらくを読む 41 人権啓発展示の可能性を示す試み—彦根城博物館の見識 湧水野亮輔

**解放新聞 2414号** (解放新聞社刊, 2009. 4. 13) : 80円  
解放の文学 36 従順につける圧政—ソンバットと『地獄の1366日』 音谷健郎

今週の1冊 『原発と地震—柏崎刈羽「震度7」の警告』  
(新潟日報社特別取材班著)

**解放新聞 2415号** (解放新聞社刊, 2009. 4. 20) : 80円  
今週の1冊 『「戦争体験」の戦後史』 (福岡良明著)

**解放新聞 2416号** (解放新聞社刊, 2009. 4. 27) : 80円  
山口公博が読む今月の本

『心はなぜ不自由なのか』 (浜田寿美男著) / 『思考のレッスン』 (丸谷オ一著) / 『異形にされた人たち』 (塩見鮮一郎著)

今週の1冊 『越境者のニッポン』 (森巢博著)

**解放新聞 2417号** (解放新聞社刊, 2009. 5. 4) : 120円  
多様な教育を求めて—不登校から学ぶ フリースクールの学校づくり 中村国生

ぶらくを読む 42 大阪の部落の歴史を書きかえることができたか 湧水野亮輔

**解放新聞 2418号** (解放新聞社刊, 2009. 5. 11) : 80円  
解放の文学 37 「国民詩人」に気高さの根—宋友恵と『尹東柱評伝』 音谷健郎

マチからムラから 「ひとり部落民」にはさせない 川口泰司

今週の1冊 『女兒に対する差別と暴力』 (房野桂・田中正子編著)

**解放新聞 2419号** (解放新聞社刊, 2009. 5. 18) : 80円  
今週の1冊 『教員免許更新制を問う』 (今津孝次郎著)

**解放新聞 2420号** (解放新聞社刊, 2009. 5. 25) : 80円  
特集 改悪入管法を読む 1 入管2法体制からの歴史的な大転換 上 佐藤文明

今週の1冊 『多読術』 (松岡正剛著)

**解放新聞 2421号** (解放新聞社刊, 2009. 6. 1) : 120円  
多様な教育を求めて—不登校から学ぶ 14 シューレ中の実践—子ども中心の教育— 奥地圭子

改悪入管法を読む 1 入管2法体制からの歴史的な大転換 下 佐藤文明

今週の1冊 『貧魂社会ニッポンへ』 (ソウルイン釜ヶ崎編著)

ぶらくを読む 43 忍者・毛皮・天皇制 新刊拾遺その1 湧水野亮輔

やみ夜の森 2 絵と文 山戸寛

**解放新聞 2422号** (解放新聞社刊, 2009. 6. 8) : 80円  
解放の文学 38 「戦争の記憶」の真摯な追及—井上俊夫と詩集『八十六歳の戦争論』 音谷健郎

**解放新聞 2423号** (解放新聞社刊, 2009. 6. 15) : 80円  
改悪入管法を読む 2 在日の願い裏切る新居住地支配 上 佐藤文明

今週の1冊 『差別と日本人』 (野中広務・辛淑玉)

**解放新聞大阪版 1780号** (解放新聞社大阪支局刊, 2009. 5. 25) : 70円

大阪の部落史を歩く 1 戦国時代の瓦屋村—太鼓屋源蔵のびしょうじ

**解放新聞改進黨 384号** (部落解放同盟改進黨支部刊, 2009. 3)

傍聴記 第14・15回京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会が行われる

2000年調査からみる改進黨地区の実態 第4回 教育の実態

**解放新聞改進黨 385号** (部落解放同盟改進黨支部刊, 2009. 4)

京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会 傍聴を終えて 上

**解放新聞改進黨 386号** (部落解放同盟改進黨支部刊, 2009. 5)

京都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会 傍聴を終えて 中

**解放新聞京都版 817号** (解放新聞社京都支局刊, 2009. 4. 1) : 280円

2009年度一般運動方針 (第1次案)

**解放新聞京都市版 212号** (部落解放同盟京都市協議会刊, 2009. 6) : 150円

田中のまちづくり運動とコミュニティセンターのあり方

**解放新聞東京版 713号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 4. 1) : 90円

人々を支えた部落文化 3 生活の危機管理—江戸時代の警察 川元祥一

**解放新聞東京版 714号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 4. 15) : 90円

人々を支えた部落文化 4 皮から革へ—鞣しの技術と文化 川元祥一

**解放新聞東京版 715号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 5. 1) : 90円

人々を支えた部落文化 5 伝統芸能の原点 川元祥一

**解放新聞東京版 716号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 5. 15) : 90円

人々を支えた部落文化 6 近代社会を築いた肉食文化 川元祥一

**解放新聞東京版 717号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 6. 1) : 90円

人々を支えた部落文化 7 新しい地域社会と文化を築く 川元祥一

**解放新聞東京版 718号** (解放新聞社東京支局刊, 2009. 6. 15) : 90円

東京を中心とする一部落・差別の歴史 1 藤沢靖介

**解放新聞広島県版 1957号** (解放新聞社広島支局刊, 2009. 6. 5)

解放理論を学び発展させるために—小森龍邦県連顧問に聞く— 1

# 収集逐次刊行物目次 (2009年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**あい・ゆーKYOTO 34** (京都市人権文化推進課刊, 2009.

5)

あきらめてはいかん～転んでも起きあがってきた僕が語れること～ 宇梶剛士

**明日を拓く 74・75** (東日本部落解放研究所刊, 2008. 3) : 2,100円

座談会 大熊監督の部落問題ビデオをめぐって 大熊照夫 / 井桁碧 / 門馬幸夫 / 柚木祖元 / 吉田勉

講演 戦時下日本政府のユダヤ人対策と「歴史修正主義」 金子マーティン

シリーズたずねる 5 金子マーティンさん「ぼくはロマが好きでロマのことに関わっているのは」 聞き手井桁碧

埼玉・部落女性実態調査の取り組み 小野寺あや

なぜ藍染は穢れとされたのか—藍染屋・検非違使・キョメー 吉田勉

本の紹介 吉田文茂著『透徹した人道主義者 岡崎精郎』 藤沢靖介

**明日を拓く 76 解放研究 22号** (東日本部落解放研究所刊, 2008. 9) : 2,100円

特集 第14回全国部落史研究交流会

全体会議 被差別民史における鎌倉 鳥山洋

前近代史分科会報告 陸奥国棚倉磯多頭支配組織の内部動向と地域社会 横山陽子 / 旦那場と地域における警備活動—下野国を中心に— 坂井康人 / 前近代史分科会の討論 小倉英樹

近現代史分科会報告 戦時下「京都市地方改善地区整理事業」から戦後「錦林地区改良住宅建設事業」へ 前川修 / 占領期の同和行政—GHQの政策の評価を中心に— 金井宏司 / 近現代史分科会の討論 田原行人

**あすぱる 19** (甲賀・湖南人権センター刊, 2009. 3)

講演記録 基地を抱えた村の村づくりと役場職員の役割

～沖縄県読谷村の事例を通して～ 小橋川清弘

人間を「分類」しない社会へ—感情表現から始まる私の発見— 青木悦

**大阪の部落史通信 44** (大阪の部落史委員会刊, 2009. 3)

本文編を刊行、全巻完結!!

完結にあたって 上田正昭 / 牛馬の出現に関する覚書き—『大阪の部落史』の完結によせて— 積山洋 / 古代の大阪と被差別民 井上満郎 / 商業流通の要としての中世大阪と部落史 布引敏雄 / 『大阪の部落史』第十巻(本文編) 近世の概要 寺木伸明 / 辛未戸籍の編成と戸籍改め 北崎豊二 / 『大阪の部落史』第十巻の現代について 渡辺俊雄

「大阪の部落史通信」1号～44号総目次

**大塩研究 60号** (大塩事件研究会刊, 2009. 3)

『大塩研究』目次 第51号～第60号

**岡山部落解放研究所報 288号** (岡山部落解放研究所刊, 2009. 3) : 100円

講演要約 在日コリアンと古代の渡来文化 ■ (チョ) 智鉦

**解放教育 498** (解放教育研究所編, 2009. 5) : 770円

特集 授業づくりの実践・私が大切にしていること

解放教育・バックナンバー (485号～496号・2008年4月号～2009年3月号)

**解放教育 499** (解放教育研究所編, 2009. 6) : 770円

特集 自らをふりかえり再構築する～日教組第58次全国教研人権教育実践から～

**解放新聞 2412号** (解放新聞社刊, 2009. 3. 30) : 80円

今週の1冊 『アラブ、祈りとしての文学』 (岡真理著)

**解放新聞 2413号** (解放新聞社刊, 2009. 4. 6) : 120円

ブラジル人学校は子どものセーフティネット

多様な教育を求めて—不登校から学ぶ 12 フリースクー

## 事務局よりお知らせ

講座報告にありますように、5月から6月にかけての出張講座全3回を無事終えることができました。後半期の部落史連続講座では、11月に世界人権問題研究センターの本郷浩二さん、関西大学の石元清英さん、12月に元佐賀大学の白石正明さんに講演していただく予定です。詳しくは、ホームページ・メールマガジン等でお知らせいたしますので是非、ご参加ください。

8月12日(水)から16日(日)まで、解放センターの休館に伴い休室いたします。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分